

2018年10月14日(日)-21日(日)



エイチエムピー・シアターカンパニー 狂想的身体論

「高野聖」

原作：泉鏡花

構成演出：笠井友仁

出演：森田祐利栄、米沢千草、原由恵
竹内宏樹、岸本昌也、田口翼

【解説】

熱狂的な文学ファンをもつ、近代文学耽美主義の巨匠、泉鏡花の初期作品『高野聖』を、エイチエムピー・シアターカンパニーの笠井友仁が舞台化。柱に写す映像や、俳優のストップモーションを駆使して、石川県金沢出身の文学者を深掘りしていく笠井の野心作。表現者工房を2週間に渡るロングラン形態で公演した。

2018年11月3日(土)-5日(月)



アトリエ・センターフォワード 第15回公演

「あじわうとき 2018」

作・演出：矢内文章

出演：矢内文章、七味まゆ味

【解説】

パブルの熱狂とその崩壊をあの一兆円詐欺事件の尾上縫をモデルにし、たった二人の俳優が疾走しながら演じ抜く。人生を「あじわうとき」はいつだったのか？矢内が痛烈に現代人に問いかける。東京の劇団が、大阪に滞在してみっちりとした練り上げた公演だった。

2018年12月22日(土)-24日(月)



IKSALON表現者工房二周年シリーズ 市民参加演劇公演part 1

「土に寝ころぶ女たち」

作・演出：横田 修

出演：坂口修一、館智子、木下菜穂子、若旦那家康、
美輝明希、まえかつと
以下、市民参加の方々
飯田紀史、植野登紀子、川口海渡、下茂太一、
松江夏樹、真銅美織、宮澤弘一、森田歩、YAKO

【解説】

週末に東京から地方に集まる農業サークルの人々とその地方の住人。やって来る人と去っていく人。はたして「そこ」には何かがのこったのか？市民参加リーディングをプロデュースしてきた表現者工房で、初めての市民参加「演劇」は、奇しくも演出家横田がその「生命」が何かを問う作品となった。



表現者のコラム Vol.2

矢内文章 (アトリエ・センターフォワード)

【新年早々アレですが】

演劇って楽しいことばかりではありません。人間の闇とか自分の負の部分を見つめることになって精神的にきついし、大抵は儲かりません。

環境面でもブラックです。現場での長時間労働は当たり前。帰宅後もあれこれ…。疲弊して辞めていく仲間もたくさんいました。まあ、私もそういう環境を作ってしまった一人なのですが…。それでも、やってしまうのです。「生き残ってすごいわ！」などと妙にリスペクトされたりもしますが、やらざるを得ないだけです。表現しなければ窒息してしまうドロドロでアツアツのマグマを自分の内側に感じてしまうから。もちろん、整えて食べやすいように表現しますが。

とはいえ、誰もがそんなふうに関わっているわけではありません。むしろ、ディープな方が少ないと思いますし、そのほうが良いと思っています。演劇はいわゆるプロのためにあるのではなく、誰もが参加でき楽しめる表現ですから。

この国では演劇教育が小中学校にないことや、伝統芸能の格式化、新劇が一時は労働運動化したことなどから、現在、とても狭い世界になっています。残念です。もっと楽しんでほしいと思っています。気軽に、気楽に。失敗してもいい。むしろ失敗からいいものが生まれる。それが演劇ですから。

演じてみる、台本を書いてみる。衣装や舞台セットを考えてみる。演劇は共同での表現ですので、そこには出会いがあります。コミュニケーションがあります。いろいろな考え方や見る角度があり、様々な立場や出自、背景を持った人たちがいます。ぜひ、いろんな人たちと生み出すグループ感を味わってください。

そんなふうを楽しむ人が増えていけば、冒頭に愚痴った演劇環境も変わっていくでしょう。時間はかかりますが、そんな取り組みを今年もやっていきたいと思っています。そんなのどこでやってるのって？

表現者工房があるじゃないですか！



矢内文章

(アトリエ・センターフォワード)